

身体的拘束等の適正化のための指針

社会福祉法人 ほうえい会
特別養護老人ホーム 栄光の杜

平成 18 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改訂

平成 30 年 4 月 1 日改訂

平成 31 年 4 月 1 日改訂

令和 5 年 4 月 1 日改訂

1. 身体的拘束等の適正化に関する基本的考え方

身体的拘束は、入居者様の生活の自由を制限するものであり、尊厳ある生活を阻むものです。当施設では、入居者様の尊厳と主体性を尊重し、身体的拘束を安易に正当化することなく職員一人ひとりが身体的・精神的弊害を理解し、拘束廃止に向けた意識をもち、身体的拘束をしないケアの実施に努めます。

(1) 介護保険指定基準の身体拘束禁止の規定

サービス提供にあたっては、当該入居者様又は他入居者様等の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体的拘束その他の入居者様の行動を制限する行為を禁止しています。

(2) 緊急・やむを得ない場合の例外三原則

入居者様個々の心身の状況を勘案し、疾病・障害を理解した上で身体的拘束を行わないケアの提供をすることが原則です。しかしながら、以下の3つの要素のすべてを満たす状態にある場合は、必要最低限の身体的拘束を行うことがあります。

①切迫性 : 入居者様本人または他の入居者様等の生命又は身体が危険にさらされる可能性が著しく高いこと。

②非代替性 : 身体的拘束その他の行動制限を行う以外に代替する介護方法がないこと。

③一時性 : 身体的拘束その他の行動制限が一時的なものであること。

※身体的拘束を行う場合には、以上3つの要件を全て満たすことが必要です。

2. 身体的拘束適正化検討委員会その他施設内の組織に関する事項

(1) 身体的拘束適正化検討委員会の設置

当施設では、身体的拘束の適正化に向けて身体的拘束適正化検討委員会を設置します。

① 設置目的

- ・施設内での身体的拘束適正化に向けての現状把握及び改善についての検討
- ・身体的拘束を実施せざるを得ない場合の検討及び手続き
- ・身体的拘束を実施した場合の解除の検討
- ・身体的拘束廃止に関する職員全体への指導

②身体的拘束適正化検討委員会の構成員

- ア) 施設長
- イ) 副施設長
- ウ) 医師
- エ) 生活課長
- オ) 看護職員
- カ) 生活相談員
- キ) 介護支援専門員
- ク) 機能訓練指導員
- ケ) 介護職員（介護係長、介護統括主任、フロアリーダー）
- コ) 栄養士

※ この委員会の責任者は生活課長とし、その時参加可能な委員で構成する。

③身体的拘束適正化検討委員会の開催

- ・ 一ヶ月に一回定期開催します。
- ・ 必要時は随時開催します。
- ・ 急な事態（数時間以内に身体的拘束を要す場合）は、生命保持の観点から多職種共同での委員会に参加できない事が想定されます。その為、意見を聞くなどの対応により各スタッフの意見を盛り込み検討します。

* 身体的拘束の廃止のために、各職種の専門性に基づくアプローチから、チームケアを行うことを基本とし、それぞれの果たすべき役割に責任をもって対応します。

（施設長 副施設長）

- 1) 身体的拘束適正化検討委員会の統轄管理
- 2) ケア現場における諸課題の統轄責任

（医師）

- 1) 医療行為への対応
- 2) 看護職員との連携
- 3) 専門的知見からの助言

（生活課長）

- 1) 身体的拘束適正化検討委員会の統括責任
- 2) 身体的拘束適正化に向けた職員教育
- 3) 各部署間との連絡、連携調整
- 4) 記録の整備

（看護職員）

- 1) 医師との連携
- 2) 施設における医療行為範囲の整備
- 3) 重度化する入居者様の状態観察
- 4) 記録の整備

(生活相談員・介護支援専門員)

- 1) 身体的拘束適正化に向けた職員教育
- 2) 医療機関、ご家族との連絡調整
- 3) ご家族の意向に添ったケアの確立
- 4) 施設のハード・ソフト面の改善
- 5) チームケアの確立
- 6) 記録の整備

(栄養士)

- 1) 経鼻・経管栄養から経口への取り組みとマネジメント
- 2) 入居者様の状態に応じた食事の工夫

(機能訓練指導員)

- 1) 身体機能面の評価、機能回復へのアプローチ
- 2) 福祉用具を用いた住環境の整備
- 3) 重度化する入居者様の状態観察
- 4) 記録の整備

(介護職員)

- 1) 拘束がもたらす弊害を正確に認識する
- 2) 入居者様の尊厳を理解する
- 3) 入居者様の疾病、障害等による行動特性の理解
- 4) 入居者様個々の心身の状態を把握し基本的ケアに努める
- 5) 入居者様とのコミュニケーションを充分にとる
- 6) 記録は正確かつ丁寧に記録

3. 身体的拘束適正化のための職員研修に関する基本方針

介護に携わる全ての従業員に対して、身体的拘束廃止と人権を尊重したケアの励行を図り職員教育を行います。

- ① 定期的な教育・研修（年2回）の実施
- ② 新任者に対する身体的拘束廃止・改善のための研修の実施
- ③ その他必要な教育・研修の実施

4. 施設内で発生した身体的拘束の報告方法等の方策に関する基本方針

身体的拘束の事例発見及び検討事例が発生した際には、施設内整備マニュアル（手順書）を則り報告～相談～検討を行います。

- 1) 手順書 規則2-4「身体的拘束に関する取り決め」に則り対応を検討する。
- 2) 身体的拘束適正化検討委員会の会議録の回覧 内容の速やかな周知、徹底

3) ご家族向けの報告様式の整備

- ・身体拘束に関する説明書 「様式 S-1」
- ・身体拘束解除報告書 「様式 S-2」

5. 身体的拘束発生時の対応に関する基本方針

ご本人又は入居者様の生命又は身体を保護する為の措置として緊急やむを得ず身体的拘束を行わなければならない場合は、以下の手順に従って実施します。

1) カンファレンスの実施

緊急やむを得ない状況になった場合、身体的拘束適正化検討委員会を中心として、各関係部署の代表が集まり、拘束による入居者様の心身の損害や拘束をしない場合のリスクについて検討し、身体的拘束を行うことを選択する前に

【①切迫性 ②非代替性 ③一時性】3要素の全てを満たしているかどうかについて検討・確認します。要件を検討・確認した上で身体的拘束を行うことを選択した場合は、拘束の方法、場所、時間帯、期間等について検討し本人・ご家族に対する説明書を作成します。

また、廃止（解除）に向けた取り組み改善の検討会を早急に行い実施に努めます。

2) 入居者様本人やご家族に対しての説明

身体的拘束の内容・目的・理由・拘束時間又は時間帯・期間・場所・改善に向けた取り組み方法を詳細に説明し、十分な理解が得られるように努めます。

また、身体的拘束の同意期限を越え、なお拘束を必要とする場合については、事前に契約者・ご家族等と行っている内容と方向性、入居者様の状態などを確認説明し、同意を得たうえで実施します。

3) 記録と再検討

法律上、身体的拘束に関する記録は義務付けられており、専用の様式を用いてその様子・心身の状況・やむを得なかった理由などを記録する。身体的拘束の早期解除に向けて、拘束の必要性や方法を随時検討します。その記録は5年間保存、行政担当部局の指導検査（監査）が行われる際に提示できるようにします。

4. 拘束の解除

3) の記録と再検討の結果、身体的拘束を継続する必要がなくなった場合は、速やかに身体的拘束を解除します。その場合には、契約者、ご家族に報告いたします。

尚、一旦、その時の状況から試行的に身体的拘束を中止し必要性を確認する場合がありますが、再度、数日以内に同様の対応で身体的拘束による対応が必要となった場合、ご家族（保証人等）に連絡し経過報告を実施するとともに、その了承のもと同意書の再手続なく生命保持の観点から同様の対応を実施させていただきます。

<介護保険指定基準において身体的拘束禁止の対象となる具体的な行為>

- (1) 徘徊しないように、車椅子やイス・ベッドに体幹や四肢をひも等で縛る。
- (2) 転落しないように、ベッドに体幹や四肢をひも等で縛る。

- (3) 自分で降りられないように、ベッド柵（サイドレール）で囲む。
- (4) 点滴・経管栄養等のチューブを抜かないように、四肢をひも等で縛る。
- (5) 点滴・経管栄養等のチューブを抜かないように、または、皮膚をかきむしらないように、手指の機能を制限するミトン型の手袋等をつける。
- (6) 車椅子・イスからずり落ちたり、立ち上がったりにしないように、Y字型拘束帯や腰ベルト、車いすテーブルをつける。
- (7) 立ち上がる能力のある人に対し立ち上がりを妨げるような椅子を使用する。
- (8) 脱衣やおむつはずしを制限するために、介護衣（つなぎ服）を着せる。
- (9) 他人への迷惑行為を防ぐ為に、ベッドなどに体幹や四肢をひも等で縛る。
- (10) 行動を落ち着かせるために、抗精神薬を過剰に服用させる。
- (11) 自分の意志で開けることのできない居室等に隔離する。

6. 入居者様等に対する当該指針の閲覧に関する基本方針

- ・当該指針については、施設内において自由に閲覧することができます。
- ・当法人ホームページに当該指針を掲載します。
- ・入居者様等の求めに応じて、当該指針の複写をお渡ししわかりやすく説明を行います。

7. その他、身体的拘束適正化の推進のために必要な基本方針

- ・身体的拘束＝虐待行為ととらえられる側面もあるため、定期的な「虐待の芽アンケート」を実施し、職員教育につなげる。
- ・情報公開として、身体的拘束については事業報告書にて、件数、理由、内容、改善の有無を報告する。
- ・リスクマネジメントとの関連から、ヒヤリ・ハットの分析及び、ご家族を呼んでのリスクカンファレンス随時開催する。